

**言語文化学専攻の教育目的、教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー**

## 教育目的

---

### 博士前期課程

博士前期課程では、自らの言語と文化、他地域の言語と文化、および言語全般について特に情報処理の観点も含めて正しく深く理解し、高度の専門的職業人としての素養と高い倫理観を身に付けた人材の育成を目的とする。さらに、その素養に基づいて、多様なメディアを活用した国際的な情報発信能力を有し、国内外の円滑なコミュニケーションに寄与できる人材を育成する。

### 博士後期課程

博士後期課程では、言語文化学諸領域を専門とする研究者を育成する。また、研究者は同時に高い水準を維持した教育者であらねばならないこと、各領域の教育全般においてきわめて高い水準の教育者が必要であることに鑑み、言語文化学諸領域の学識と知見を活かした教育に携わる高い倫理観をもった人材を育成する。

## 教育目標

---

### 博士前期課程

言語文化学専攻は、上記の理念および教育目的を達成するために、日本言語文化学、日本語学、日本語教育学、英語圏言語文化学、英語教育学、言語情報学、個別言語学、対照言語学、社会言語学等の分野の授業および研究指導により教育を行い、具体的な教育目標を次のように設定する。

1. 言語・文化に内在する諸問題を、先端的で高度なトピックを素材に深く考察することを通じて、学術的・専門的な研究方法を身に付ける。
2. 専門性を追究しながらも、隣接諸科学の知見を積極的に吸収し、自らの専門の研究に活かすことができる柔軟性と、高い倫理観に裏打ちされた幅広い見識を身に付ける。
3. 体系的に資料を収集して批判的な検討を行い、新たな視点から考察を加えて課題の解決をめざす、実践的な研究能力を修得する。
4. 自らの研究課題に応じた明確な研究テーマの設定ができるようになる。
5. 専門的な研究のための方法論にはさまざまなものがあることを知り、自らの研究課題にふさわしい方法を選択し、その方法で研究を遂行する技能に習熟する。
6. 自らの課題を追究するにあたって、関連領域における十分な専門知識を持ち、先行研究を検討したうえで、批判的な考察ができるようになる。
7. 自らの研究成果を論理的に構成・展開し、説得力のある形で表現し、発表できるようになる。
8. 自らの研究分野に関して、独自の観点や新しい知見を示せるようになる。

### 博士後期課程

言語文化学専攻は、上記の理念および教育目的を達成するために、日本言語文化学、日本語学、日本語教育学、英語圏言語文化学、英語教育学、言語情報学、個別言語学、対照言語学、社会言語学等の分野の授業および研究指導により教育を

行い、博士前期課程で培った専門領域に関する知識を徹底的に深化させる教育を行う。具体的には教育目標を次のように設定する。

1. 言語・文化に内在する諸問題を、先端的で高度なトピックを素材に深く考察することを通じて、学術的・専門的な研究方法を再確認する。また、各自の研究課題を中心として、それに関連する専門的な諸知識・技術をも身に付け、高い倫理観をもって課題の解決をめざすことを通じて、学術的研究に必要な研究遂行能力を身に付け、新たな成果を創造できるようになる。
2. 研究者・教育者として専門領域に関する高い学識と知見を持ったうえで、特定の専門領域について真理を追求する能力を備え、研究者・教育者として持つべき高い見識と倫理を身に付ける。
3. 自らの研究課題に応じた明確な研究テーマの設定を、自立的にできるようになる。
4. 専門的な研究のための方法論についての見識を有し、自らの研究課題の追究にふさわしい学術的方法を設計し、その方法を駆使して研究を遂行する技能を身に付け、その合理性を説明できるようになる。
5. 自らの研究課題を追究するにあたって、関連領域における先行研究を十分な範囲にわたって検討し、批判的な考察ができるようになる。
6. 自らの研究成果を論理的な根拠に基づいて展開・構成し、実証性に裏付けられた説得力のある形で表現し、発表できるようになる。
7. 自らの研究課題について、独自の視点から考察を加え、当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた研究を行えるようになる。

## ディプロマ・ポリシー（学修評価・学位の授与方針）

---

### 博士前期課程

言語文化学専攻博士前期課程では、言語と文化に関する高度な専門性と研究企画力および国際性を身に付け、現代社会が直面する諸問題の解決に、幅広い文化と隣接する科学に関する知見をもって、柔軟に取り組むことができる人材を育成する。そのために、以下の項目を学位授与のために身に付けるべき能力とする。

1. 物語・小説・詩歌などといった国内外の文学や様々な文化的事象の研究、および個別言語学、対照言語学、社会言語学、応用言語学などの言語研究といった専門領域における先端的知識を修得し、研究に活かす能力。
2. 隣接諸科学の知見と自らの専門の研究を関連づけ、批判的・建設的な考察を行う能力。
3. 授業での発表や修士論文の作成を通して、学術的内容を論理的に構成する思考力、文章や、各種データを用いた効果的な表現能力。
4. 授業における発表や議論を通して、多様なメディアを活用し、グローバルな視点から情報を収集することで自らの知識・認識を相対化し、これによって、個人の認識や文化、専門分野の違いを超えて目的を達成するコミュニケーション能力。
5. 自らの研究の遂行および成果の発表と、それを通じた社会貢献について、使命感、責任感、高い倫理観に基づいて判断することのできる能力。

### 博士後期課程

言語文化学専攻博士後期課程では、言語と文化に関する極めて高度な学術的専門性と研究企画力および幅広い国際性を身に付け、現代社会が直面する諸問題を発見し、それに対して独自の視点と高度な学術的知見をもって、柔軟な解決策を提案できる人材を育成する。そのために、以下の項目を学位授与のために身に付けるべき能力とする。

1. 物語・小説・詩歌などといった国内外の文学や様々な文化的事象の研究、および個別言語学、対照言語学、社会言語学、応用言語学などの言語研究といった専門領域における極めて高度な先端的知識を修得し、研究に活かす能力。
2. 博士論文作成に向けた研究の過程で、隣接諸科学の知見と自らの専門の研究を関連づけ、批判的・建設的な考察を行い、独創的に課題を設定し、解決を行う能力。

3. 研究発表や博士論文の作成を通して、自らの研究成果を論理的に構成する思考力、文章や、各種データを用いた効果的な表現・立証能力。
4. 研究発表や議論を通して、多様なメディアを活用し、グローバルな視点から情報を収集することで自らの知識・認識を相対化し、これによって、個人の認識や文化、専門分野の違いを超えて目的を達成する高度なコミュニケーション能力。
5. 自らの研究の遂行および成果の発表と、それを通じた社会貢献について、使命感、責任感、高い倫理観に基づいて判断することのできる能力。

## カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

### 博士前期課程

言語文化学専攻博士前期課程では、ディプロマ・ポリシーにおいて示した能力を持つ人材を育成するために、必修を含む31単位の科目を修得することと、研究指導を受けて修士論文を作成し、論文の審査および最終試験に合格することを、課程修了の必要要件として課している。本課程では、次のような科目編成により、学位取得に必要とされる専門知識・能力を修得させる。

- 共通教育科目では、「研究公正A」を1年次の必修科目とし、講義およびグループワークを通じて、研究の遂行・発表において必要とされる高度な倫理観を修得させる。
- 特別演習・特別研究科目では、1年次に「言語文化学特別演習IA・IB」「言語文化学特別研究IA・IB」、2年次に「言語文化学特別演習IIA・IIB」「言語文化学特別研究IIA・IIB」を置き、そのうち「言語文化学特別演習IA・IB、IIA・IIB」と「言語文化学特別研究IA・IB」を必修科目とする。これらの科目では、指導教員の個別の研究指導を通して、学術的内容を論理的に構成する思考力、文章や各種データを用いた効果的な表現能力を身に付ける。さらに、発表や議論を通して、自らの知識を相対化し、相互理解を図るためのコミュニケーション能力を養う。
- 専門科目においては、日本言語文化学、日本語学、日本語教育学、英語圏言語文化学、英語教育学、言語情報学、個別言語学、対照言語学、社会言語学等の授業を1年次に講義形式で提供する。これらの科目を通して、先端的知識を修得し、研究に活かす能力および、隣接諸科学の知見と自らの専門の研究を関連づけ、批判的・建設的な考察を行う能力を身につけさせる。

### 博士後期課程

言語文化学専攻博士後期課程では、ディプロマ・ポリシーにおいて示した能力を持つ人材を育成するために、必修を含む17単位の科目を修得することと、研究指導を受けて博士論文を作成し、論文の審査および最終試験に合格することを、課程修了の必要要件として課している。本課程では、次のような科目編成により、学位取得に必要とされる専門知識・能力を修得させる。

- 共通教育科目では、「研究公正B」を1年次の必修科目とし、講義およびグループワークを通じて、研究の遂行・発表において必要とされる高度な倫理観を修得させる。
- 特別演習・特別研究科目では、1年次に「言語文化学研究演習IA・IB」、2年次に「言語文化学研究演習IIA・IIB」、3年次に「言語文化学研究演習IIIA・IIIB」を置き、必修科目とする。これらの科目では、指導教員の個別指導を通して、自らの研究成果を論理的に構成する思考力、文章や各種データを用いた効果的な表現能力を身に付ける。また、研究発表や議論を通して、多様なメディアを活用し、グローバルな視点から情報を収集することで自らの知識・認識を相対化し、これによって、個人の認識や文化、専門分野の違いを超えて目的を達成する高度なコミュニケーション能力を養う。
- 専攻選択科目では、日本言語文化学、日本語学、日本語教育学、英語圏言語文化学、英語教育学、言語情報学、個別言語学、対照言語学、社会言語学等といった専門領域において、極めて高度な先端的知識を修得し、研究に活かす能力を養う。さらに、隣接諸科学の知見と自らの専門の研究を関連づけ、批判的・建設的な考察を行い、独創的に課題を設定し、解決を行う能力を身につけさせる。